

松蔭 校長室だより

2025年 2月 1日 発行

—校長から保護者の皆様へのメッセージです—

松蔭中学校・松蔭高等学校

校長 浅井宣光

あなたがたが私を選んだのではない。私があなたがたを選んだ。(ヨハネによる福音書 15:16)

学校の授業 「受ける」と「参加する」のちがい

2020年春からのコロナ禍の学校では、様々な形態のオンライン授業が実施されていました。なかでも双方向型のリアルタイム・オンライン(リモート)授業は、学びを継続できる有効な手段でした。ところがその授業では、教師がPC画面上に生徒の姿を確認しても、記録のうえでは授業への「出席」扱いとはならない、というのが当時の文科省の判断でした。この点について、とある地方の教育行政関係者が次のようにコメントする記事を読みました。

「オンラインで授業の実施は、『そもそも出席とは何か』という問いを私たちに突きつけた。教室で授業中に居眠りする生徒と、自宅からオンラインで参加して発言する生徒。オンライン授業の制度から言えば、前者が『出席』で、後者は『出席停止』や『欠席』になる。しかし、実際に学習する生徒はどちらかといえば、後者である。物理的に学校に来ることを『出席』と呼び、それが『授業への参加』と別の概念であれば、後者こそ評価されるべきではないか。また、不登校の状態が続いていた生徒が、なんとか保健室や別室登校できるようになったが、まだ、授業には参加できない場合もある。それでも、物理的に登校することよりも、孤立せず、人とのつながりを持つとするとする姿勢は高く評価されるべきではないか」

現行の高校学習指導要領は、コロナ禍の前年から実施されていましたが、学びに対する意欲や積極性も教育活動の重要な柱とされています。静かに授業を「受ける」、〇〇先生の授業を「受ける」等々の言い方が一般的ですが、いかにも受け身で主体的ではない印象があります。一方、授業に「参加する」と言えば、意欲的に学びに向かう姿勢を感じますし、教室で積極的に発言する生徒と対話を重ねる教員の姿を思い浮かべます。生徒からどちらの言葉が口をついて出てくるかによって、その授業の在り方、すなわち活気ある、学びに向かう授業が行われているかどうか分かるように思うのです。

2学期に高校LSコースの探究授業「言語探究」を参観しました。グループごとにプログラムに取り組み、問いを重ね、ワークシートに文字を書き込む生徒の姿に、「授業を受けている」印象はありません。先述の教育行政関係者の言葉を借りれば、授業に「物理的」に出席したうえで発言し、さらに言えば「人とのつながりを持つとするとする姿勢」があるのだから、高く評価されるべきものでしょう。

視点が変われば、自分の生き方も人への接し方も変わります。冒頭の聖句から気付かされるものが、教育や子育ての場でもたくさんあるように思います。

授業評価アンケートの結果から

昨年12月、全校生徒を対象に今年度の「授業評価アンケート」を実施しました。設問は下記の10項目で、各設問に対する回答に4つの選択肢(①とてもそう思う 4点 ②ややそう思う 3点 ③あまりそう思わない 2点 ④思わない 1点)を設けこのポイントを集計して、平均値を算出したものをまとめています。

Q1 先生の授業ではポイントが整理されている(板書・電子黒板・プリント・実技指導を含む)。

Q2 先生は、自分たちが勉強しやすいよう、いろいろ工夫してくれている。

Q3 先生の授業での説明はわかりやすい。

Q4 先生が使うICT教材(教材・映像・画像・板書など)は、わかりやすい。

Q5 私には、ICTデバイスを利用した学習が合っている。(利用していない科目は答えなくてよい)

Q6 先生は、生徒からの質問に対して、丁寧に応えてくれる。

Q7 先生は、授業に対する熱意が感じられる。

Q8 私は、わからないことがあると先生に質問したり相談したりしている。

Q9 私は、先生の授業に満足している。

Q10 私は、先生の授業を受けて、自分の学力(実技科目であればその技術)がついてきていると思う。

このアンケートを実施する目的は2点あります。1点めは、教員が自らの授業改善を図るとともに、教育力向上に必要な方策や整備が必要な教育環境を検討するための資料とすることです。毎年3学期早々に、個々の教員にアンケート結果を返却します。また各教科ごとに振り返りの作業を行います。フィードバックを受けた教員は、年度末までの残りの授業について改善をはかり、より満足度の高い授業にするのです。特に「先生の授業での説明はわかりやすい」「質問しやすい」の項目のポイントアップに向けた創意工夫を先生方に依頼しています。

目的の2点めとして、様々な視点からの設問についての各科目授業アンケートに回答することで、生徒自身が振り返り、自己点検する機会になる、ということがあげられます。毎年のアンケート結果を分析する際には、こちらの点を特に重視しています。生徒は、10の設問のそれぞれの観点からアンケートに取り組むことで、授業に参加した自分を振り返り、教員は、アンケート後の授業内容について内容改善のための工夫を重ねます。両者の相乗効果による学力向上にもつながります。

アンケートの全般結果については下表のとおりです。前年度と比べて改善されていることも伺えます。

<2024年度授業評価アンケート 全般結果>

○のべ回答数7,088件(対象は107授業科目) 3.0ポイント以上授業は98(88%。前年度85%)					
○各教員ポイントは平均3.37(4点満点、中間値2.5。前年度3.31)					
○各教員ポイントの幅は3.95~2.57(前年度3.90~2.61)					
○平均3.50ポイント以上の教員は34名(前年度21名)					
○教科別平均ポイントの幅は3.65~2.95(前年度3.57~2.98)					
○中学ストリーム、高校コース、LS特進・標準クラスの平均ポイント					
(中学)					
DS中1	3.07	DS中2	3.41	DS中3	3.32
GS中1	3.30	GS中2	3.35	GS中3	3.31
(高校)					
LS高1特進	3.07	LS高2特進	3.63	高3特進	3.58
LS高1標準	3.26	LS高2標準	3.41	高2標準	3.50
AA高1	3.36	AA高2	3.53		
GL高1	3.36	GL高2	3.53		
○高校LS「言語探究」学年別平均ポイント					
高1	3.03	高2	3.32	高3	3.36